別子往還道を訪ねて

第三回　旧別子②

ダイヤモンド水でリフレッシュした後、第一通洞南口を目指します。第一通洞は、明治19年（1886）に貫通した別子銅山最初の鉱石などの輸送の為のトンネルです。標高約1100mに位置し、総延長は、1021mになります。これによって険しい銅山越（標高1294m）をしなくても、北口のある角石原まで馬車鉄道による運搬が可能になりました。

折角ここまで来られたら銅山越を目指す前に東の方向へ足を伸ばし東延へと向かってみてください。東延は、大正5年に採鉱本部が東平に移されるまで採鉱の中心地でした。明治8年、フランス人鉱山技師のルイ・ラロックにより書かれた『別子鉱山目論見書』に基づいた計画が実行されたもので、谷を埋めて土地を造成し、機械場が設けられました。今でも堰堤が当時のまま残っています。また、19年の歳月を要し完成した竪坑である、東延斜坑の坑口も整備され残っています。

第一通洞の南口まで戻り、別子銅山最初の坑口である歓喜間符を目指します。焼鉱窯があった木方部落を抜け、歓喜間符に到着します。元禄3年（1690）、吉岡銅山支配人　田向重右衛門一行が見分に来たところ素晴らしい銅山であることが分かり、そのときの喜びを坑口の名前にしたと言われています。銅山越で新居浜市内を展望した後、帰路につきます。蘭塔場跡が深い緑の谷の中に見る事が出来ます。

この谷はかつて製錬吹処があり、伐採と煙害により荒れ果てていました。広瀬宰平も、年間5、6万本といった植林を行っていましたが、2代目住友総理事となる伊庭貞剛は、年間100万本を超える植林を開始します。「別子全山を旧のあおあおとした姿にしてこれを大自然にかえさねばならない」といった伊庭の思想は、その後も歴代経営者に引き継がれました。目出度町（めったまち）に昔日の繁栄を感じながら、無事に下山しましょう。

歓喜間符

広告欄
広告欄

広告掲載については、ソネ　デザインスタジオ（☎ 0897 - 33 - 5721）へお問い合わせください。